

教育・人材育成ワーキンググループ（第7回）

議事概要

- 日 時 令和4年3月3日（木）10：00～11：18
- 場 所 オンライン開催／中央合同庁舎第8号館6階623会議室
- 出席者（総合科学技術・イノベーション会議議員）  
藤井座長、上山議員、梶田議員（Web）、小谷議員、佐藤議員（Web）、  
梶原議員、篠原議員、橋本議員  
（中央教育審議会、産業構造審議会委員）  
秋田委員（Web）、荒瀬委員（Web）、今村委員（Web）、  
岩本委員（Web）、木村委員、戸ヶ崎委員（Web）、  
中島委員（Web）、松田委員（Web）、渡邊委員（Web）  
（事務局）  
松尾事務局長、井上事務局長補、米田統括官、大塚内閣府審議官、  
覺道審議官、高原審議官、阿蘇審議官、橋爪参事官、大月参事官  
（文部科学省）  
茂里大臣官房学習基盤審議官（Web）  
（文部科学省教育政策局教育人材政策課）  
小幡課長（Web）  
（文部科学省科学技術・学術政策局）  
寺門科学技術・学術総括官（Web）  
（文部科学省科学技術・学術政策局人材政策課）  
斉藤課長  
（経済産業省商務・サービスグループサービス政策課）  
浅野課長兼教育産業室長（Web）
- 議題（1）Society 5.0の実現に向けた教育・人材育成に関する政策パッケージ  
（案）について  
（2）その他

○ 議事概要

午前10時00分 開会

○藤井座長 それでは、定刻となりましたので、只今より総合科学技術・イノベーション会議、教育・人材育成ワーキンググループ——第7回目になります——を開催いたします。本日が最終回となる予定であります。

本日は委員の欠席はございません。皆さん御出席と聞いております。

早速議事に入りたいと思います。本日は前回お示ししました政策パッケージ素案に対していただきました御意見、それから、国民の皆様からのアンケートの結果を踏まえて修正をかけておりますので、再度御議論をいただきまして、最終的な取りまとめを目指したいと思います。

まず、事務局から修正点についての御説明をお願いいたします。

○合田審議官 内閣府の合田です。

それでは、資料1に基づきまして御説明申し上げたいと思います。

8月から8回にわたりまして、本教育・人材育成ワーキンググループ、大変御多忙の中御議論賜りまして、心から事務局として感謝を申し上げたいと思っております。

2月9日の御議論、それから、国民の皆様から、これは10代の方々も含めて頂戴いたしました御意見などを踏まえて修正した箇所を中心に手短かに御説明をさせていただきたいと思っております。

まず、9ページを御覧いただきたいと思います。

9ページですが、デジタル・シティズンシップについての言及ですですが、学校教育において大きな意味でメディアリテラシーを育むという大きな文脈を位置付けさせていただいているところです。戸ヶ崎教育長から御指摘をいただいたものです。

また、次の10ページですですが、同様に戸ヶ崎教育長の方から困難を抱えていても一見困難に直面しているように見えず見過ごされてしまう場合、こうしたことも含めて丁寧に対応が必要であること。それから、下の方ですですが、ここでお示しをさせていただいている特性というのは、子供についても状況によってはグラデーションがあつて様々であることということをつけ加えさせていただいております。

次に、23ページに飛んでいただきたいと思っております。

23ページと24ページですが、子供たちの学びの時間と空間の多様化ということでして、23ページが修正前です。前回の本ワーキンググループにおきまして、この左から右へというのは一直線の話ではなくて、正にグラデーションなのではないかという御指摘をいただきまし

た。24ページが修正案でして、例えば質の高い一斉授業と子供を主体とした学びというのは、軽重はございますが、言わばハイブリッドで教育が展開していくという趣旨のことを図でお示しさせていただいているところです。

また、25ページですが、今後学校の教室が変わることに伴って学校の機能も大きく変わっていくということですが、真ん中にごございますように、このような学校の変容には社会の理解が不可欠であるということをご位置付けさせていただいております。

また、26ページ、この学びの時間や空間の多様化におきまして、平均点主義を脱するのですとかみんなと同じことができることのみを評価するという価値観からの脱却というのが重要ですが、その際、2017年の学習指導要領改訂で重視されております主体的・対話的で深い学びとの関係を図示させていただいているところです。

27ページですが、政策1については、本日、戸ヶ崎教育長からも御意見をいただいておりますが、「教師の指導と支援のもとに」という文言を加えさせていただいております。また、政策2については、「特別支援教育に関する専門性の向上など教師の基礎的資質の更なる向上を図る」と追加をさせていただいております。また、政策3については、「教師の経験に裏付けられた暗黙知」という文言を加えさせていただいております。

34ページを御覧いただきたいというふうに思っております。

探究・STEAM教育についてですが、一番上にごございますように、小学校の前の段階、幼児教育において、幼児期において育まれた好奇心や探究心をより伸ばしていくという観点、重要な観点でして、付け加えさせていただいております。また、同様に一番下ですが、前回御指摘がございました大阪万博などを活用した探究・STEAM教育のムーブメントの醸成ということについても書かせていただいております。

38ページを御覧いただければというふうに思っております。

政策9ですが、従前はオンラインプラットフォームということで書いておりましたが、リアルな体験の場の提供、その中では子供の学びを支えるメンターの役割を担う企業から学校への人的支援ということの重要性も書かせていただいております。

また、39ページですが、10-2といたしまして、これも前回、岩本委員などから御指摘がありました地域活性化起業人制度、企業版ふるさと納税などについて、その周知あるいは活用といったことについて記述を追加させていただいております。

46ページを御覧いただきたいというふうに思っております。

今村委員の方から46ページの1-1ですですが、こうした特異な才能のある子供たちが直

面している困難さというのは、小学校の低学年から顕在化しているということについて記述を追加させていただいております。

52ページを御覧いただきたいと思います。

52ページ、文理分断からの脱却・ジェンダーギャップの解消ですが、国民からいただいた御意見を踏まえまして、どのような学びを選択するかについてはバイアスの掛からない状況で、あくまでも個々人の意思で判断できるようにすることが重要であるということを改めて強調させていただいたところです。

62ページを御覧いただきたいと思っております。

前回、今回の政策パッケージをどのようにフォローアップしていくのかという御指摘があったところです。今回、62ページを資料として追加させていただいておりまして、政策な着実な実施に向けてということです。特に教育については、一つ目のパラグラフでございますように、教師自身も100万人おりますし、子供も1,200万ということでして、関わっている人が非常に多いため、様々な御意見がございますが、重要なのは次代を担う子供たちに何が必要か、そして、自分には何ができるかという視点であるということを書かせていただいております。

また、教育の問題を議論する際には、大人の頭の中にあるかつて自分が受けてきた教育とは異なるということがかつてのいわゆるゆとり教育をめぐる議論の際のように、これが不安や違和感に通じるということがございますが、今回御議論いただきましたようにwell-beingを実現するという観点から学びの転換が不可欠であるということを整理させていただいております。

その上で、この政策パッケージのフォローアップにおきましては、一方的にオーディットする、チェックをするということではなくて、内閣府も含めてどういう把握の仕方あるいは検証の仕方、あるいは更なる進化について、どのような把握をしていくのかということ自体も含めて、関係者が知恵を出し合いながら議論し形づくっていくということが必要であること。それから、パフォーマンス評価の確立のために大型研究費であるSIPの活用ということも検討させていただいておりますが、内閣府としても府省を越えた協働の中でイノベーションの観点からも実証、実践に取り組むことが必要である。デマンドサイドからフィードバックを繰り返すことで、政策をアジャイルに組み立てて、より良いものに進化させていく新しい政策手法に取り組むことも含めて、CSTIにおいて専門的に議論し、施策を深化していくことも志向したいという基本的な考え方を整理させていただいております。これ以外にも国民か

らいただいた御意見で分かりやすさの問題あるいは片仮名が多いといった御指摘もございました、これらも内容を分かりやすくお示しするなどの修正を加えているところです。

修正点は以上です。

○藤井座長 ありがとうございます。

それでは、自由討議に入りたいと思います。本ワーキングは本日で最終回でありますので、各論についてでも構いませんし、それから、これまでの議論を通じて全般に対するコメントでも結構です。本日は時間1時間ということですので、お一人1回の御発言となってしまうかと思いますが、端的な御発言への御協力をよろしく願いいたします。

それでは、御意見ある方から挙手をお願いできればと思います。

では、まず荒瀬委員からお願いいたします。

○荒瀬委員 ありがとうございます。

昨年8月のキックオフミーティングでしたでしょうか、大変お世話になりました。ありがとうございました。この会議では、これからの初等中等教育を考える上で、多様で多面的な示唆をたくさんいただいたというふうに思っております。その点について深く感謝しております。

私、中教審の初等中等教育分科会に所属しておりますが、今後の初中分科会での議論に色々と活かしていかなければならないものがたくさんあったということを今日のこのまとめも含めて考えております。この間、義務教育と高等学校教育の連携・接続、あるいはまた学習指導要領の在り方などについて考える機会がたくさんございました。とり訳高等学校教育とは何かという問いと向き合うことが多かったように思っております。18歳で成人になるという新しい枠組みに対して、現行の高等学校教育が対応できているのだろうかということが非常に気掛かりであります。高等学校教育を語る際に、常に言葉としては共通性と多様性ということが言われてきた訳ではありますが、主権者である人を育てることが高等学校教育の最大の共通性ではないかということを思っています。

また、今日お示しいただきました34ページで赤の付け加えがあった訳ではありますが、幼児期からの教育が非常に重要であるということは、これは間違いないことでありまして、小中学校の教育とどうつないでいくのか、その際、十分でなかった点を補っていくということもとても大事だと思います。高等学校教育においては、その初等中等教育の最終の期間として、やり直しも含めて義務教育段階での学び直しをしていくといったようなこととか、あるいは職業に就くことについて考えて準備する、あるいはまた高等教育に向けて考えて準備する、そういった正に多様な高校生活、高校での学びが必要であるというふうに思います。

高等学校教育の多様性ということのしっかりとした議論を中教審の初等中等教育分科会でも重ねていくことが重要であると思っております。また、その教育を支える教師の役割は何かということについても考えることが大事であるということをおもっています。

最後に、事務局のまとめてくださった審議のまとめは大変斬新でありました。文章を連ねる形ではなくて、視覚的な理解を促す各ページのデザインは分かりやすさとともに図の読解の力というのいうんでしょうか、読み手の読み解く力というのを求めるものであって、こうしたことも今後私たち自身がしっかりと考えていかなければならないなということをおもった次第です。本当にありがとうございました。

以上です。

○藤井座長 ありがとうございました。成年年齢の18歳への引き下げは4月からということですので、その点、高校での学びがカバーすることがより一層大きくなっていくということかと思えます。

続きまして、戸ヶ崎委員、お願いいたします。

○戸ヶ崎委員 戸ヶ崎です。

まず、この短期間に当面の日本の教育の羅針盤となるであろう高遠で風格あふれる大作のパッケージ案を作成していただきました。藤井座長、合田審議官、事務局の方々に敬意と感謝を申し上げたいと思います。

私の方からは提出した資料2に基づいて意見を述べさせていただきます。

先ほど御説明の中にありましたが24ページ、教師による一斉授業と子供主体の学び、また、ティーチングとコーチングなど、両者を対立や単なる移行と解釈しないなどの配慮から、ハイブリッド化、グラデーション化したことに関しての賛同と意見を述べさせていただきます。

最近、学校訪問で授業を見ていると、本来指導すべきことをきちんと指導しなかったり、指導をためらったりするような経験の浅い教師が目についています。このパッケージ案でも、指導よりも支援という言葉がたくさん登場しています。近年、指導という単語自体が教師の願いや価値観などを児童生徒に押し付けているというイメージで捉えられている危惧がございます。ある研究会で、教師は指導者ではなくて伴走者であるので、指導や指示をしてはいけない、という発言までございました。指導というのはイコール強制ではありませんし、支援する指導もございます。

かつて平成元年改訂の学習指導要領において、新しい学力観と個性を活かす教育が強調されました。当時は、盛んに今後は指導ではなく支援だ、のだという流布をされました。学習指導

案は学習支援案へ、机間巡視は机間指導に、更に机間支援という言葉などに置き換えるべきというそうした指導もありました。中には、教師は教えるはいけないのいけないという発言も度々聞かれました。そうした流れの中で、本来指導すべきことがきちんと指導されなくなり、学力低下等を危惧する声が次第に広がってきました。

そして、前回も申し上げましたが、平成8年の中教審答申では、教えるべきことは徹底的に教えるべしという言葉が度々引用されるなどして、支援という用語は徐々に影が薄くなり、いわゆる揺り戻しが行われました。

子供の主体性の尊重と教師の指導性の発揮は、指導と評価の関係と同様に表裏一体であり、教師の確かな指導力と適切な児童生徒理解に基づいて判断されるべきものだと思います。自己学習力が付いていないと判断するときは、丁寧に指導しなければなりません。十分な力を付けてくれば、支援に徹することもできます。実態を踏まえない指導や支援は、子供の学びを妨げたり、放置してしまうことにもなりかねません。

日本の教育は様々な二項対立のはざまで揺れてきました。それぞれのよさを活かすというのが常に課題でした。今も昔も、古いことや自らに近いことは否定されがちで、新しいことや外の世界にユートピアを見出す傾向があります。24ページのハイブリッド化、グラデーショナル化が深く意味することについて、学校教育関係者はもちろんのこと、保護者や広く国民の理解を得られるように進めて、同じ轍を踏まないようにしていくべきだと思います。

資料については以上ですが、追加で申し上げます。62ページに関連してですが、パッケージ案の内容が教育関係者、特に教育委員会や学校現場などに腹落ちし、日々の教育実践に結びついていくことが何よりも大切であると考えます。また、国任せや他人事とならないよう、全ての関係者が当事者意識を持って取り組んでいく必要もあります。さらに、アウトリーチしていく際には、先ほど合田審議官からもありましたが、専門用語や片仮名語も多いので、この内容を丁寧に分かりやすく伝えていくことも大切なのではないかと思います。伝えることと伝わるということは違うの違います。これまでにない大変素晴らしい内容ですので、一目で分かりやすいリーフレットの作成なども検討していただけたらと存じます。

今後、ここにある様々な提言を受けて、中教審などで具体的な議論が進んでいく訳ですが、それと同時並行で、全ての教育関係者がこの提言等に対して学校現場などでできるものから挑戦や実践の自走を重ね、納得解を得ながら事前に受皿を作っておくという必要もあると思っています。国の答申や通知を待たずとも、このパッケージに実践者としての魂を吹き込んでいく活動を、私自身も率先垂範していきたいと考えております。ありがとうございました。

○藤井座長 どうもありがとうございました。広く関係者の間でこの内容を共有していくことも今後重要になってくるのかなと思います。

それでは、秋田委員、お願いいたします。

○秋田委員 学習院大学の秋田です。

藤井座長、合田審議官はじめこの委員会の皆様の知恵の結集で、このような形で俯瞰的なこれからのマップが示されたこと、大変意義深いことだと考えております。その中で改めて資料を読み解きまして、どうしても入れていただきたいと思うことがございまして、発言をさせていただきます。

それは令和の日本型学校教育におきまして、副題が全ての子供たちの可能性を引き出す個別最適な学びと協働的な学びの一体的展開ということで、全ての子供たちの可能性を引き出すための様々な方法というものが議論されて、この報告書は作られております。しかしながら、今回のこのパッケージには一文も「全ての子供たちの可能性を引き出す」という言葉がございません。例えば5ページのところでありますが、w e l l - b e i n g とか多様性ということは今回書かれたのですが、「優れた能力があるものを伸ばせばどんな個人間・地域間格差を広げてもいいということでは決してない」ということは事実であります。しかし、更にそれを強めていただくことが可能であれば、全ての子供の良さと可能性を伸ばし、また、各地域の卓越性・独自性を活かすというポジティブな形の表現で令和の日本型学校教育の理念をここに入れていただくことはできないかと考えるところであります。

中教審でこの議論を教育課程部会でしたときに、もともとのタイトルは、途中までは「どの子ども取り残すことない」とか「落とさない」という議論でした。でも、それは従来のものを落とし込まないという意味であり、そうではなく、これからの教育は全ての子供たちの可能性を伸ばすという意味であります。多様性というのが単にダイバーシティでみんな違うというだけで、それを受け入れるWELLBEINGであれば、それは福祉の問題です。公教育は子供たちの可能性が伸びる、伸ばす、引き出すということが教育の基本的な考え方です。ですので、5ページのところにそれを入れていただくことができないか。また、例えばそれ以外のところでも24ページのところにもなりますが、ここも子供たちの特性を踏まえた個別最適な学びということは出ているのいるのです。特性を踏まえることは重要ですが、現状を受け入れるだけではなく、その子供の可能性というものを私たちは期待し、これからの社会を作っていくという意味で、その部分も令和の日本型学校教育の報告書の基本理念の言葉が一文も載せないというのは、やはり不足していると思いますので、その点を是非足していただきたいということです。

また、最終ページになりますが、今回追加スライドが入ったことの意味は大変大きいと考えております。そして、大変よくまとまっていると考えております。しかしながら、冒頭で子供目線ということが入り、終わりのところには書かれているのですが、最初の1段落目を見ますと、次世代を担う子供たちのために何が必要か、そして、自分にはできるのかという視点であったという国民ということは書かれているのですが、今回の大きな特徴は生徒、高校生や中高生自らが自分たちもまた教育の責任を負う参加者の一人として意見を言うことを行ったということであり、そして、自分たちもまた教育に責任を負いながら一緒に考えていくという視点が出されたことです。これは委員の中の木村先生をはじめ、色々な高校の先生方の御協力だと思ふの思ふのですが、やはりそうした理念でしょうか、子供の権利としての意見表明権、学ぶ権利というがこの会議では果たされているので、その部分が一行でもよいので加筆いただきたいと思ふ思います。やはり高校生も主体になって自分たちの学校を作るその一人であるという意見があったことを是非書き留めていただきたいと思っております。

また、大変細かなことでは、個別最適というところの20ページ辺りのところでも個別化ということは書かれているのですが、個性化、要するにそれぞれの可能性としての個性化部分というものが多様性という言葉では表現されていますが、記載されていません。是非その辺り、非常に優れた子も、それから、困難を抱えている子も、どの子も可能性が伸びると、そうした理念に基づいて政策が実現されていくということがこれからの少子化の社会において重要だろうと思ふ思いますので、この点を、是非書き加えていただきたいと思ふところでもあります。こうした報告書ができ、それを更にまた文部科学省の方でそれぞれの審議会で議論し、活かしていきたいと思ふところでもあります。

以上になります。ありがとうございます。

○藤井座長 ありがとうございます。御意見を踏まえて今後表現を工夫させていただければと思ふ思います。ありがとうございます。

では、続きまして、渡邊委員、お願いいたします。

○渡邊委員 どうもありがとうございます。

私は今回の取りまとめに賛同する旨の感想を述べさせていただきますが、本日出た御意見等の反映も含めて、藤井座長に一任したいと思ふ思います。

このパッケージは、今の時代全体を俯瞰し位置付け、教育・人材育成を位置付けた大変良いまとめになったと思ふ思います。特に今DXと色々よく言われますが、そうした視点だけではなく、Society 5.0の実現に向けた教育・人材育成の政策パッケージであり、しかも、それが将

来的なwell-beingを実現する社会に向けての施策であるとして、こうした今のステージがどういう位置付けなのかを明確に示した点で、非常に意義のある提言にさせていただいたと思います。この総合科学技術・イノベーション会議での検討にとどまらず、関係先に是非連携していただき、実現につなげていけたらと思います。

連携するということは資料に記載のとおり、もちろん中教審や産構審も含めてということですが、荒瀬委員の御発言にもあったように、高校段階のSTEAM教育等の重要性を考えたときには、高等教育との関係も出てきますので、政府の教育未来創造会議等との連携が重要です。国境を越えた探究・STEAM教育として官民協働での「トビタテ！留学JAPAN」を入れていただいたのも、連携という点で非常に意味があると思います。

前回申し上げたように、コロナ禍によるグローバル化の停滞を放置すると日本の弱点をまた深掘りしてしまうこととなりますので、この国境を越えた探究活動としてという、「トビタテ！留学JAPAN」を入れていただいたのは大変意義があると思います。是非関係省庁や審議会、政府の会議体等につないで、できれば骨太方針にも反映させられるように進めていただけたらと思いました。

加えて、文部科学省関係では、中長期的には学習指導要領の次期改訂にも関係しますし、次期教育振興基本計画の検討とも連携する必要があることは承知しております。また、文部科学省で打ち出した教育進化のための改革ビジョンに、今回のパッケージの視点が色濃く反映されているのを感じました。是非実行に向けてこれからも連携を強化できたらと思います。

最後にもう一点、8ページで西山教授の「DXの思考法」が出典になっておりますが、つい最近、西山教授のお話を直接お聞きしました。この「DXの思考法」のレイヤー構造というのは少し分かりにくい部分もあると思うのですが、今回のパッケージでは、DX思考のレイヤー構造というものを学校と社会、民間の力のリソースの共同体としてつなぎ、非常に明確に整理し分かりやすくしていただいたと思います。大変良い整理をしていただき感謝を申し上げます。

私からは、是非、これで取りまとめさせていただきたいということでの感想でした。以上です。  
○藤井座長 どうもありがとうございました。是非今後具体的なパッケージとして動かしていくことにつなげられればと思います。

続きまして、今村委員、お願いいたします。

○今村委員 今村です。発言させていただきます。

取りまとめをしていただきまして、どうもありがとうございました。私自身も今回の審議に

参加させていただき、いつも中央教育審議会に参加させていただく機会があるのですが、また、そういった場所ではないところに御参加されている委員の方々の視点からとても学ぶことが多くて、大変勉強になりました。ありがとうございました。

今回、この内容についてのコメントではなくて、この審議会で提示したことから感じた可能性についてお話をさせていただきます。まず、今回パブリックコメントにたくさんの子供たちの声が寄せられたということ、それに会議の中できちんと文字で子供たちの声を共有資料にされて、そこに対してこんな声があったということを一定の時間を取って話題にし、そして、資料の中にも反映していくということができたことが良かったと思います。これから子ども基本法が制定されるかどうか分からないのですが、中央教育審議会で様々なことをこれから審議していくにあたって、こうした子供たちが意見表明する権利を持っている、子供は大人が決めた学びを心を殺して座席に座って聞いたふりして、つまらない授業を受けたふりしているというのが学校の学びだと思っている人がいたら、いや、それすらもみんなで変えていくことができるんだよと。自分も意見があったら言えるのだよと。それに偉い人に見えているかもしれない人たちだって聞く価値があると思っているのだよということをきちんと発信できたものになったのではないかと。もっと言うと、もっとそこ自体を広報できたらよかったのではないかと。いうことを感じまして、個人的にはとてもそのプロセスにおいて可能性を感じました。

今、私たちの団体が経済産業省の方から機会をいただいて、未来の教室の実証事業の中で、学校の校則をどう対話的に変えていくのかという取組をさせていただいているのですが、やはり色々な箱の在り方や前提とされているものはみんなで変えていけると。この箱自体ではなくて、やはりプログラムの中身や子供たちに本当に届いているかということにこれから重きが置かれていくのだということもこの資料の中にはたくさん示唆されていたと思います。それが伝わっていくということが大切だと思うし、そこに意見を表明できる、するのもあなたたちの役割だということをお子たちに伝えていくことは、先ほどどなたかおっしゃっていましたが、重要な主権者教育の機会にもなりますし、今後そうあるべきだなと感じました。

あともう一点なのなのですが、23ページにお示しされていた、これはこの会議の初めのときに、一番初めから示されていた絵でしたが、たくさん学校の先生方からこの絵を職員室に掲示して、みんなでこうあっていけばいいのだということをお話したという話も聴きました。それが今回、24ページの形で進化したことはとても素晴らしいなと思いました。やはりもとの絵もすばらしかったのですが、やはり二項対立に見えていたかなというところもあって、これまで日本の教育が大切にしてきたことの中にも一定の合理性があったし、そこから学ぶべ

きことを今後も大切にしなければいけないこともあるのだということも示せるグラデーションの絵になっていることがとても更に現場に伝わりやすいメッセージになったと思うので、私はこの1枚が発信されたことも今回のこの会議の最も大切な役割を果たせた結果なのではないかと感じています。

参加をさせていただきまして、どうもありがとうございました。私からは以上です。

○藤井座長 ありがとうございました。

それでは、次に中島委員、お願いいたします。

○中島委員 ありがとうございます。改めまして、私からも本当に非常に素晴らしいといえますか、学びの多い時間を過ごさせていただきまして、ありがとうございました。取りまとめ、本当にありがとうございます。今正にここからだと思いますので、ここから先、是非良い方向に社会が動いていくこと、この方向でみんなみんなが具体的に動き出すことを心から願っています。また、今回は内閣府さんが主導していただき、省庁横断で大事な議論ができたことも素晴らしいなと思いました。

大きく2点です。少し皆さんがおっしゃっていたこととかぶるかもしれませんが。

秋田委員や今村委員からも言われていましたが、「みんなが全員できる」「みんなに可能性がある」その力を引き出していくのだと、そうした非常にポジティブなメッセージというものが今回の会の中でもずっとあったような気がします。なので、その部分が現時点でもある程度発揮されていると思うのですが、もしより書けるようならば、是非。今はどうしても中々課題解決として「今はこうした問題がある。解決していこう」という文脈でありというその姿勢としては国としてもいいと思うのですが、障がいなどの個性や特性が「問題」であるかのように見えかねないのが気になっており・・・同時に、みんなみんなに可能性があって、それを引き出していく社会を作っていこうと、そうしたポジティブなメッセージというものがしっかり出てくると、少し見ていてわくわくするのかなということを思っています。

そして、併せて次が「開かれている」ということです。色々な場の活用とか開かれた機会とか、そうしたものも一定程度発信されているかと思いました。社会的に今とても大きくそうした色々な存在の在り方が変わって行って、開いていくことでお互いにウィン・ウィンなオープンイノベーション的なものが起こってくるということがやはり世界中で起こっていると思います。そうした意味では企業もそうですし、あと、よりもしかしたら本格的に本文脈の中に入ってきていいのかなと思うのが大学ですね。やはり今、大学の在り方、高等教育そのものも変わってきており、かなりこれからの大学や高等教育のあり方への提言などもしっかり目線として

入ってくるといいのかなと思って伺っておりました。

正にここからは「思想」と「具体」の循環が大切かと思えます。今回はまず、大事な「思想」というものをもしかしたらもう少しより明確に強く発信して、この資料を世界へ出して、でも、次にくるべきものはやはり「具体」かなと思っております。そのときにオールジャパンという言葉も何回か出てきていますが、やはり色々な人たちがこれを見て学びというのもみんなそうですし、企業とか大学とか色々なところが自分たちも参画して考えよう、動き出そうという仕組みとか、そうしたある種の社会の生態系といいますかエコシステムみたいなものが生まれてくるといいなと思っています。そうした発信になったり、あるいは座組になったりすることが大事かなと思いました。

ほかに民間のこととか細かいことは幾つか事前に少し申し上げたことはあるのですが、大きくはこのようなところでしょうか。本当に、ここまで色々ありがとうございました。

○藤井座長 どうもありがとうございました。

それでは、続きまして、岩本委員、お願いいたします。

○岩本委員 中身についてと今後に向けてというので大きく二つあるのですが、中身に関しては各委員言われていたことなのですが、やはり実施に向けての最後のところに各関係者の役割とか期待みたいなものをきちんと書いた方がいいのではないかというふうに思います。これはどちらかという国がこれからこうしたことをやっていくとか、国の政策をこんなふうにとというのが、ロードマップとかに出ているのいるのですが、学校も教育委員会も生徒も産業界もそれを待って受け身じゃあ国が何かしてくれるのを待つのではなくて、これは受け手ではなくて、それぞれがこのビジョンに対しての作り手な創り手なんだというのが基本的な我々のスタンスだったと思うのです。やはり創り手として教育委員会だとか学校だとか、若しくは産業界もそれぞれがどういうスタンスとかどういう役割や期待がこれからあるのかということをややはりメッセージとしてしっかりと打ち出していく。国がこうしてフォローアップしましょうとかというだけで終わらない開かれた形で、しっかりと締めるということが大事ではないかというのが中身に関してです。

今後に向けてのところポイントは三つ意見があります。

一つは、これ書かれているとおり社会の理解が不可欠であるし、認識を共有していくとか国民との対話と、こうしたところに関してですが、まず資料でアップして終わりにせずに、私はこれ動画とかできちんと説明、この資料を今回も例えば合田審議官とか説明してくれたりしていますが、我々は何度も聞いているから分かるのですが、やはり文字だけで、資料だけで見て

も中々伝わりにくい、理解しにくい方たちはたくさんいますので、やはりこれは動画とかで説明をスライドと共にしていくようなものをきちんと作って発信していくというのが大事ではないかと思います。

特に例えばパートごとに分かれてあるとか、例えば教育委員会の指導主事の研修とか学校の研修とかでも、じゃあこの部分を10分みんなで一緒に見て、それで我々は何ができるか対話しようとか、そんなふうにも使っていけたりだとかしますので、資料のアップにとどまらずそういう形での発信、場合によっては若い、10代からもらった質問とか意見とか色々あったかと思います。そういった国民の声に対しての例えば回答だとか、でもきちんとメッセージとして出していけるということが大事ではないかというふうに思いますというのが1点目です。

2点目は、私は今回参加させていただいてとても感じたのは、今回各界を牽引されているリーダーの方たち、この委員の皆様と一緒にさせていただいてとても学びが多かったですし、個人的にも色々学ばせていただきたい方はたくさんいらっしゃいました。やはり委員の先生たちの活用というのが2点目でこれから大事ではないかというふうに思います。

国の方からこれを発信していくのも大事なのですが、各リーダーが、この委員が言いっぱなしで終わりではなく、これを作った当事者として私たちも当然やっていくという責任や使命を持っていると思いますので、そうした今の委員の方たちから各界に対してのメッセージだとか期待だとか、例えば大学から見てこれはどういう意味を持っているのか、じゃあ自分たちはこれからどうしていくのかという宣言だとかも含めて、委員の方たちからのメッセージだとかをしっかりと広く発信していくということなども、せっかくこれだけの方たちがいらっしゃいますので、大事ではないかというのが2点目です。

最後、3点目は国民との対話の仕掛けとか仕組みも最後に何かもう一段検討できないかというところです。

今回出したものに対して、まだまだもっと良い政策もあるかもしれない、若しくはこれを受けてこんな実践をしたとか、こんなふうに活用して進めているみたいな、そういったものがまたフィードバックされて、また共有できるとか、何かそうした一方的な発信で終わらない対話の仕組みというのもう一段何かあるとこれが更に着実な実施といいますか、ムーブメントにつながっていくのではないかと思います。

すみません、長くなりましたが、本当にいい機会に参加させていただきまして、ありがとうございます。以上です。

○藤井座長 ありがとうございます。発信を今後どのように考えていくかということも大事な

ポイントかと思いました。

続きまして、佐藤議員、お願いいたします。

○佐藤議員 ありがとうございます。

最初に、皆さんおっしゃっておられるように藤井座長、合田審議官を始めといたしまして、ここまでまとめていただくまでに御努力された方々に、最大限の敬意を表したいと思います。私のコメントは取りまとめ案の文言の修正とかそうしたことを求めるものでは必ずしもございませんが、2点ほど申し上げたいと思います。

その前に私自身の気付きとして、教育が様々なステークホルダーで成り立っている、という事を改めて強く感じました。特に今回、子供たちの声というのを私初めて生々しく聞きましたが、非常に印象的でした。と同時に恐らく教育現場といいますか、実際に教鞭を取っておられる方が何を思い、何に不足感があって、どうしてほしいのかという声もこれから大いに聴いていかなければいけないなということを強く感じました。

その上で、今後のフォローアップ体制と、それから、ここで取り上げ切れなかった残課題をどうするかという点について少しだけ申し上げたいと思います。フォローアップ体制の問題については、先ほど戸ヶ崎さんがおっしゃったように教育現場でこの新しい方針がどのようにして実装化されていくのかということ、それを誰がどのようにしてチェックをしていくのかということです。それは子供たちの声の中にもありましたが、理念は高いのだが、本当にこれが実のあるものになっていくのかという疑念をどう払拭していくのか、ということでもあります。この点のフォローアップについては、62ページにきちっと書かれておりますので、これをやっていくということだと思いますが、私自身も個人的にフォローアップの責任を負っていきなきゃいけないということを強く感じました。

特に11ページにあるようなデジタル教育の推進と、デジタル田園都市国家構想との間での整合性については、CSTIの立場でもきちっと見ていかなければいけないと思います。フォローアップ体制をしっかり作るとともに、その実効性を確保していかなければならないと思います。しっかり考えていきたいというふうに思います。

それから、残課題の問題ですが、例えばグローバル人材の育成という問題は十分に議論をしきれなかったと感じています。グローバル人材とは何か、どういうグローバル人材が必要かということは、世界情勢の動きの中で変わっていくものですので、現時点で日本としてはどのようなグローバル人材が必要なのかということ、もう一度別の形で議論することも残課題の一つであると思います。

又、大学入試の話は今回の議論の中ではしないということは承知していますが、中長期的にはそういった問題もあると思いますので、中長期的な課題、私の言葉で言えば残課題をどういう形で拾っていくのか、しっかりと考えていかなければならない問題ではないかと思います。

いずれにしましても、大変な御苦勞に敬意を表します。そして、これを實際現場にしっかりと届くようにすることが極めて大切であると改めて強く感じました。本当に御苦勞さまでした。ありがとうございました。

○藤井座長 ありがとうございました。フォローアップの体制、それから、残課題について御指摘をいただきました。

続きまして、松田委員、お願いいたします。

○松田委員 松田です。ありがとうございます。

まず初めに、事務局の皆様、そして、委員の皆様、本当にありがとうございました。本当に素晴らしい教育政策パッケージがまとまっているなど感じております。各国の教育政策であったり白書を読むのが趣味みたいなところがあるのですが、それらと比較して遜色ない、むしろ非常に先進的な教育政策パッケージに仕上がっていると感じます。

ただし、改めて内容を見てみますと、これらを具体的に実行するためのリソースであったりキャパシティについてはまだ具体的な方向性がある訳ではないと感じます。まだ先が完全に見通せない状況なのであろうとは思いますが、特に我が国は公的教育支出が非常に他国と比較しても限定的であるというところも今後どうしていくのかというのは、しっかりと考えていかなければいけないと思います。やはりこうした理想の教育を実現するためには、経済的な資源であったり人の資源というのは欠かせないかと思います。また、私的教育支出にどうしても依存してしまう形になると格差を拡大していく温床にもなろうかと思っておりますので、是非これを実行するための予算をどうしていくのかというのは、ここにいらっしゃる委員の皆様とともに今後是非とも考えていければと思います。

特に私は人のリソースでいうと、中教審では教員養成部会に関わっておりますので、引き続きそちらでしっかりとどうやったら教員の質を高めていくことができるのか、外部人材をどう活用していくのかについては考えていきたいと、コミットメントしていきたいと思っております。

以上です。ありがとうございます。

○藤井座長 ありがとうございました。

続きまして、梶田議員、お願いいたします。

○梶田議員 ありがとうございます。

まず、取りまとめ案、どうもありがとうございました。全体として大変よいと思います。特にこれは既にほかの委員の先生方からもありましたが、24ページの修正、グラデーションのですね、これはすばらしいと思いました。ありがとうございました。

その上で少しだけ意見を述べさせていただきます。前回の本ワーキンググループではパブコメの結果の紹介があって、私もパブコメでの御意見は本当に重要なものがあったと思います。中でも特に私が気になったものは、これは前回も発言しましたが、そもそも主体的に学ぶことができる子供がどれだけいるのか。結局多くの場合、誰かが学習の意欲を持たせるような働きかけをする必要があり、この働きかけをしっかりとしない限り教育格差が大きくなる方向、それから、学校現場に余裕がなく変化を避けるとの意見がありました。

これらの意見は本当に大切だと思います。これらの意見を取り入れて、取りまとめでは改善していただきましたが、これらの意見に対する議論と取りまとめへの反映が十分かという点、時間的な制約もあり、恐らく少し不足しているかと思っています。これらの点が心配ですので、この取りまとめの後もしっかり議論をしていく必要があるのではないかと思います。

また、STEAM教育についてもパブコメにあったように余裕のない学校現場では十分な対応が難しい可能性があるでしょうから、この文書に書き込まれておりますが、外部から相当な準備あるいは授業例をなど提供するなどして、新しい教育への転換の手助けを丁寧に行う必要があると思いますので、これも今後ともよろしく願いいたします。

そして、最後に1点、これは非常に細かい点で更に今更なので恐縮なのですが、データの見せ方について気がついたことがありまして、コメントさせていただきます。

15ページ、それから、52ページも同じなのですが、高校、学士、修士、博士といわゆる理系がピンクで色分けされていて、赤の点線で推移が書いてあります。このグラフの中で保健という緑色の区分がありますが、これは保健プラス医歯薬と想像しました。しかし、これらのいわゆる保健を大学以降で学ぶ人の多くは、高校時代にいわゆる理系として勉強している人が多いと思います。そう考えると、このデータの見せ方として高校の理系を出発点とする赤の点線がこの図でいう保健を含まないのはおかしいという気がしましたので、これは今更で申し訳ないのですが、見せ方の御検討をお願いいたします。

私の方からは以上です。どうもありがとうございました。

○藤井座長 ありがとうございます。今御指摘いただきました点も検討できればと思います。保健というところの中身に当たるかと思っています。

以上でオンラインの方はみなさんご発言いただけただでしょうか、では橋本議員、お願いいたします。

○橋本議員 先ほど私のコメントは、先ほど佐藤議員が言われたことと関係しまして、同じ流れでフォローアップのことですが、実際に実行するのは言うまでもなく文部科学省がほとんどで、文部科学省の初中局がほとんどの施策なので、そうしたことに對してこの会議が、C S T I がどのようにそこと連携してきちっと長期的な、今は私理解しているのは、ここC S T I もとても主導でこれはやった訳ですし、文部科学省においても担当部局が大変これに對して熱心だというふうに聞いていますので、大変よいのではないかと思います、実行には当然かなり時間の掛かるものも入って、そんなに時間を掛けてはいけないと言いながら実際には時間の掛かるものもある訳で、そうすると、これをどのように継続していくのかというのは実は簡単なことでなくて、御案内のように行政官は2年ごとで変わりますので、しかも、これは本当に私長くここにいて感じることは、人によって変わるのですよね。そこが行政組織の特徴的なところだと思うのですよ。なので、今回62ページの最後のパラグラフのところにC S T I の役割を明確に書いているのは、これは大変重要なことだと思うのですね。これはC S T I で責任を持つと言っているのですね。

でも、とても大変なのですよね。C S T I の事務局も変わりますから。そうすると、やはり議員が責任を持たないといけないのですよ、これ。いやいや、本当そうですよ。なので、これは藤井総長の責任だと思っていますが、藤井総長を筆頭としてほかの議員の責任ですよ、これ。とても熱心な事務局、行政官の方がいるときは心配ないのですが、そうではない方がいらっしゃることも当然あるのですね。そうすると、それは議員の方でそれをととても誘導しないと必ず止まります、必ず。だってこれに對して全部が賛成ではないですから。そうではない人たちも当然いる訳です、色々な理由で。

なので申し上げたいことは、この62ページに書かれていることは極めて重要だと思いますが、書いた以上、物とても責任がC S T I はあるのだということを藤井総長をはじめとして唯一の常勤議員の上山議員もそうですし、皆さん、私の正面にいる篠原議員も含めてとても佐藤議員が認識されておられるとさっき思いましたが、みんなとても責任があるのだということを改めて強調させていただきたいと思います。

以上です。

○藤井座長 ありがとうございます。フォローアップは非常に重要だという御指摘だったかと思えます。

それでは、篠原議員、次いで小谷議員でお願いします。

○篠原議員 では簡単に。この中身については本当に素晴らしいと思うのですが、この間のアンケート結果で出ていた懸念点をなくすためにということでお話し申し上げますと、この10ページ目のところは右下のところには子供全体の多様性が書いてあるのですが、それ以外についてはやはり変わった子たちといいですか、残りの50%の変った子たちのことが書かれているので、この間のアンケート結果でも一般の子たちが置いていかれるのではないかという心配があったと思うのですね。一応右下に書いてあるのですが、ぱっと見るとそれ以外の方がやはり目立つので、この上のヘッドラインの部分、ここのヘッドラインの部分も発達障害とか特異な才能のことだけを書いてあるので、ヘッドラインの頭のところに一人一人の個性を引き出すとかというふうな格好で、全体を捉えているのだよということを一言入れたらどうかというものがまず提案の一つです。

同じような意味なのですが、今度は24ページを御覧になっていただくと、24ページのところも同じように全体の子供の個性を引き出すというふうな概念の下に書かれているのですが、ここもやはり見ると上のヘッドラインの1行目に「子供の認知の特性を踏まえ」、飽くまでも認知特性だけに着目しているのです。だから、ここの部分も子供の認知特性、個性、興味の違いを踏まえるというのがここで全体を捉まえているのだよとした方がよりここでの議論が伝わるのではないかと思います。

以上です。

○藤井座長 ありがとうございます。この点は是非反映させていただきたいと思います。

それでは、小谷議員、お願いします。

○小谷議員 最初に、この会議に参加させていただきまして、色々勉強する機会をいただきました。ふだんお聞きすることがない色々なことを聞く機会もありまして、勉強になりました。また、この形で取りまとめていただきました座長、それから、合田審議官、関係者の皆さんの御努力に感謝したいと思います。

二つ申し上げたいと思います。一つは昨年末ぐらいに欧州議会が緊急アセスメントに関するレポートを出しました。これはアカデミック、例えば大学等の研究に関するレポートですが、そのようなアカデミックでの研究において専門性を深めるということや同僚からの評価というのは非常に重要だということは協調されつつも、オープンサイエンスの立場からデータや知識の供用や、それから、大学の中での分野融合だけではなくて様々なステークホルダーとの連携という活動に対して評価をすべきと。これはヨーロッパでイニシアチブを取って進めていくと

いうレポートでございました。

研究者のような専門性を期待されるものであってすらそのようなことが強調される世の中で、今回取りまとめていただいた中で小中高の学びの機会に社会を知りながら、色々な産業界ということもございましたが、色々な視点で学ぶことの社会の中での意味を理解しながら対話等も含めてやっていくということが明確に示されたことは非常によかったと思っています。それがまず感想としてです。

それから、二つ目はやはりここに長くいると同じことを考えるのかなと思ったのですが、62ページの追加スライドで三つ書かれているのは非常に重要だと思っておりまして、特にやはりCSTIで議論したということは、これがきちんと予算も含めて実行していくということは非常に重要でして、そのことを最後に書いていただいたのかなというふうには思いますが、ここは非常に重要だと思っています。

今日、委員の多くの方が発言されたように予算化していく、実行に移していく、施策として実行していくということも重要ですが、関係している非常にたくさんの立場の方からの御理解と申しますか、ここで議論したスピリッツの部分を広めていくということは非常に重要ですので、単に政策だけではなくて、若しくはビデオを作るということもですが、シンポジウムや、あとキャラバンのような形でここで議論したことを広めていくようなことがあるといいと思っています。特に委員会の中でも何度か発言しましたように、地方において色々な情報の伝達というのは非常に格差があるというふうに思っています。そうしたことを考えると、ある程度色々な場所でこうしたことの議論を更に深めていくような機会を作っていただければと思います。そのことが62ページに一言書いていただくと有り難いと思っています。

以上です。

○藤井座長 ありがとうございます。

それでは、上山議員、お願いします。

○上山議員 今回とても本当に美しい絵柄で、パワーポイントでまとめてくださって、この間の議論をこんなにきれいにできるのだなというので大変感心して拝見しましたし、皆様の御意見を貴重なものとして拝聴いたしました。

二つだけ簡単に申し上げます。一つはこれぐらいきちんとしたものができたのだとすれば、英語で発信するような形をすればいいのではないのかなと。日本という国が置かれている初等中等、さらには高等教育も含めたところにおける国家的な視点としてももう少し対外的な発信もあるかもしれないなど。少し1983年にレーガン政権下のときにアメリカの教育問題を議論

したN a t i o n a t R i s kという危機に直面する国家というものを教育界で論じたパンフレットが出て、全世界で5, 000万部ぐらいたしか読まれたと思いますが、そうしたものがあかなということが一つと、もう一つはフォローアップの面で言うと、ここのタイトルはSociety 5.0の実現に向けたと書かれているということは、文字どおりC S T Iの話だと思うのですが、このSociety 5.0というのを目に見えるものにしていくという意味で、単に教育、初等中等教育だけではなくてだけではなくてシステム自体の変化をある特定の地域の中で目に見えるようにしていくということがある種の文部科学省に投げるだけの政策評価ではなくて、具体的にC S T Iが関わっていけることがあるのかなと。それは通常の予算ではできないようなものをC S T Iがもし持っているのだとすれば、そうしたものを使いながらこれを特定のところで単なる教育だけではない様々な社会的な連携の中で見えるようにしていく、システムの変化が見えるようにしていくという形でC S T Iは関わっていくことが可能なのかもしれないというふうに思いました。

以上で感想です。ありがとうございます。

○藤井座長 ありがとうございます。

それでは、木村委員、次に梶原議員、順番でお願いいたします。

○木村委員 ありがとうございます。木村です。

まずは、藤井座長、それから、合田審議官を始め、この会の委員の皆様が正にw e l l - b e i n gの実現というのにふさわしいそれぞれの先生方の御専門から本気でこんなに議論しているのだというのをこのしているのだというのをこのしているのだというのをこの場で見られたことを私は幸せに思っています。正直、全ての委員の先生方がとても格好良くて、こんなふうにみんな本気で未来を作ろう、みんなのために幸せな未来を作ろうとお話しされている姿は本当にすてきでした。その思いは多分生徒たち、学生たちにも伝わっているのだなというふうに感じた次第です。特に事務局の皆さんがU Iを含めて、中高生を始め10代の子たちがきちんとパブコメに興味を持てるような仕組みを作ってくくださったこと、それから、ポンチ絵の分かりやすさであったりとか文章を平易に書いてくださったりとか、本当に学びの当事者である彼らを意識したような作りになってアウトプットできたということは、本当にすてきなことだなと思いました。本当にそうした思いが次の世代にも伝わっていくというのは感じました。

何より今回もちろんわくわくしてくれたり、賛同してくれるようなというコメントも10代から寄せられたのは事実ですが、私が一番大切だなと思ったのは、クリティカルな意見も多く集まったのですよね。そこはやはり今までの例えば公教育において上からどーんと落ちてきた

ものをこれをやらなくちゃいけないのだという公務員的発想でやるとか、それを受け止める生徒たちもこうしたルールの中で自分は思うところがあるが、周りに合わせなくちゃいけないのだという同調圧力に負けて自分が出せないといった、そこからの何か脱却みたいな思いを感じました。

なので、その意味で今回のパブリックコメントはもちろん量が集まったということも大きな意味はあるのですが、マインドセットといいますか、その背景にありますみんな一人一人が未来を作れるのだという思いを持ってくれたことが一番大きな財産だったのではないのかなと思ったりもしました。その意味で、その背景を作ってくくださった事務局の方々にも感謝申し上げたいと思います。

私から2点。一つは多様性という言葉が今回の政策パッケージにおいても重要なキーワードかなと思っておりませんが、多様性という言葉が少しどうしても人に紐づくような形でしか伝わらないという印象があります。本来、多様性は、もちろん人の多様性もあるかもしれないのですが、それは少し教育の現場でのレッテルを張るみたいな形になりかねないので、私自身は環境が多様であるべきだと思っておりまして。多様な環境を学びの場に用意しておくことによって、そこを人が移動できるといいますか、5年前と今で私は全然考えることが違うのですが、その意味で今はこう考えている、でも、5年後は全然違うかもしれないとなったときに、環境をぱっと移動できるということが大切だと思っているので、その流動性をどのように高めていくかというのが例えば学校も今所属している学校ではない学校と平行に在籍できたり、お仕事もそうですね。これから仕事に関する、仕事の流動性を高めるとともに平行キャリアで進めていくみたいなこともこれからどんどん進んでいくかと思うのですがうのですが、そこを支える政策であるとかサポートがどのように国として体制を作れるかというのは、これから継続して考えていかななくちゃいけないところだと思いますので、それを踏まえた上での場所の多様性みたいなところが伝わる形でいくといいかなと。

場所というのをもう少し砕いて言いますと、もう少し本質的なことを言いますと、バリューといいますか価値だと思っているのですよね。その場所で求められている価値に合わせて子供たちは成長しようとしてます。そこで求められている価値を生み出すための方向で学び続けようとする訳ですが、その価値が多様であることが大切だと思うのですよね。つまり例えば大学4年生の子が大学院に進学すれば論文を書く世界で初めてということが大切な価値になって、それが例えばお金になるかどうかは全然関係ない訳ですが、だが、同じ大学4年生の子供が就職して企業の営業に入れば売上げを求められる訳で、そうすると、やはり世界で初めてとかどう

でもよくて、とにかく数字を出せという話になるみたいな、そうした価値、彼らが置かれている価値によって今自分はどんな力を身に付けようとかというのも変わってきたりする訳ではないですか。だから、その場所のバリューを多様に用意するという事は非常に重要でありますし、今回オールジャパンの体制で教育に関わる、色々なステークホルダーが関わるのだというのは一つそこに大きな意味があるのかなと思っております。

生徒・学生視点で言うと、評価の多様化につながるということですので、是非その評価の多様化というところは何らかの形でこれを見てくれた10代の子たちにも伝わるような形で入れたいなと思いました。その結果、例えば本当に今はない新しい価値を生み出すということもつながるような気がしますので、本当に国語・算数・理科・社会で何か評価されちゃって、それだけで自分ではできない子なのだとなくなっちゃっている子がたまにいます。地域で担任から嫌われちゃったとかクラスの子とうまくいかなかったというすごい狭い世界での評価なのかな、それで本当に命を落としてしまうような子もいます。なので、それだけ評価が多様であって、色々なこんな面白いことがあるよ、君すごい面白いところがあるねというのを色々な人たちから言ってもらえるような、何かそうした評価の多様化みたいな多様な環境を作っていくのだというのを示していただけるとうれしいなと思いました。

最後に1点だけ、2点目ですが、2点目はどこかに、これで終わりではない訳で、継続していく、もっと言うと科学技術もどんどん進化していく中で何か未来につながるような、これからも継続してこうしたものを模索し続けるんだみたいな宣言があってもいいのかなという気がしました。例えばSociety 5.0という流れで来たときにバーチャルとかメタバースという言葉が入っていませんが、やはりそこは入れたいなという気がしていて、さっきの多様な環境となったときに、例えばメタバースの環境の中で今ない価値が求められる環境というのが多分たくさんこれから乱立してくることと思います。そのときにやはりこのCSTIでの議論がベースになる上で、例えばそれがもう来年来るかもしれないし、半年後に来るかもしれないといったときのこの提言といいますか、政策パッケージの案がきちんと機能するためには、やはり変わり得る社会において、また我々次の世代が生み出す新しい価値にもキャッチアップしていく、もっと言うとそれをどんどん生み出していくのだという意味での未来に向けた今後も模索し続けるのだという姿勢を何か示すような文言があるといいのかなと思ったりもしました。

私自身非常に勉強になりましたし、これからも現場レベルで生徒たちに多様であるということをお伝え続けていけたらいいなと思いました。本当にありがとうございました。以上です。

○藤井座長 ありがとうございました。

それでは、梶原議員、お願いします。

○梶原議員 藤井座長を始め事務局の方に本当に感謝したいと思います。ここまでおまとめいただきまして、大変ありがとうございます。

私がC S T Iの議員を務めたと最初の頃にこの初等中等教育の分野がC S T Iの中で議論する対象になるのかならないのかといった議論をしたことがございます。当時は私はまだ議員になっただけで、対象ではないのだろうという印象があったのですが、時間が経ち、第6期基本計画を検討する中で、イノベーション人材の育成を議論するには、教育システムそのものに影響を及ぼさないといけないということで検討が始まり、こうした形で集大成としてまとまったというのは非常に感慨深いものがあります。

企業においても、人材育成のことを考えていると、必ず、日本の教育システムが中々難しいという話になってしまうところがありました。企業にも日本の社会全体、教育システムそのものが変わらなければいけないということを認識している人たちが一定数います。日本全体で、社会全体で当事者意識を持って変えていくことが重要だと思っていますし、それを皆さんに理解していただくためのダイアログが重要だと思います。

アジャイル的に取り組みながらフォローしていくということですから、とてもいい好事例がたくさんあるのにそれが横展開できないのは、何がネックだったのかを考える必要があると思います。今まではできていなかったが、この政策を打つことによってこう変わった、子供たちがとても生き生きするようになったとそう実感できるようなフォローアップのビデオのようなものを作ったりしながら、変わっている、変わってきた、ということ全体を全体的に広めるような共感の伝播があるといいと思いました。個々の好事例は本当によく聞くのですので、広げ方を工夫するといいと思いました。ありがとうございました。

○藤井座長 ありがとうございました。

これで皆さんに御発言をいただきました。私自身も一言だけ述べさせていただきますと、今回の議論は、教育・人材育成と言っている訳ですが、正に未来を作る議論、Society 5.0の実現を念頭に置いて、社会総出でこれをどのようにしていくかという議論をしていただいたのかなと思います。皆さん大変活発な御議論をいただきましたおかげで、事務局の御尽力もありまして、このような形で良い取りまとめができたと考えています。今日御意見をいただきました特にフォローアップの件、アジャイルにということもありましたが、それと同時にこの考え方をどうやって様々なステークホルダーの皆さんと広く共有していくかという議論もありました。場合によっては対話の機会を設けることも含めて、今後その在り方については少し具体的に検

討する必要があると思いました。

いずれにしましても、本日いただきました御意見を踏まえまして、このパッケージ案としては年度内にまとめることになると考えております。具体的な修正については、事務局から個別に御相談、調整もさせていただいた上で、最終的には私の方で取りまとめをさせていただくということで、御一任いただくということよろしいでしょうか。

それでは、今後まとめます政策パッケージは、総合科学技術・イノベーション会議若しくは統合イノベーション戦略推進会議において、政府として政策パッケージとして決定していただくように、内閣府においてお取り計らいをお願いしたいと思います。

これで最後になりますが、本ワーキングは8月のキックオフ以来、合計8回にわたって開催をいたしました。大学、アカデミア、産業界、それから、NPOの御関係の方々、教育関係者など非常に多様な立場の皆様から御参加をいただき、積極的な御意見を頂戴いたしました。非常に充実した御議論をいただきましたことに改めまして座長として感謝申し上げたいと思います。どうもありがとうございました。

それでは、最後に松尾事務局長から一言御挨拶を頂戴したいと思います。

○松尾事務局長 事務局を代表いたしまして、最後に御礼申し上げたいと思います。

8回にわたりまして御議論賜り、本当にありがとうございました。この間、藤井座長、関係の先生方には貴重な御意見を賜りました。中教審、産構審、CSTIでこうした形でまとめさせていただきまがした。この結果については教育未来実行本部等にもつなげてしっかりとフォローしていきたいと思ひます。

ただ、1点だけ申し上げます。教育の真のステークホルダーは本来子供であります。ただし委員会という形になりますと、中々子供たちの意見を伺うことが出来ないのですが、今回多くの子供たちから御意見を賜りました。そして、こうした形でまとめさせていただき、事務局としましても非常に勉強になりました。また、橋本先生からもありましたが、フォローアップということで行政官は通常2年で変わるのですが、きちんと過去の仕事に責任を持つ、見ていくということを我々ももう一回改めて考えていきたいと思ひます。しっかりとフォローしていくことは我々の責務だと思ひますので、どうぞよろしくお願ひします。

また、この間、多くの先生方、それから、ステークホルダーのお子様方、それから、親御さんの方々にも見ていただいて、こうした形でまとまりました。本当にありがとうございました。しっかりとフォローさせていただきたいと思ひますので、ありがとうございました。

○藤井座長 ありがとうございます。

それでは、これもちまして第7回のワーキンググループを終了させていただきます。これまで大変精力的な御参加、御意見、本当にありがとうございました。

これにて終了させていただきます。どうもありがとうございました。

午前11時18分 閉会